

## 侵入外来雑草に関して

農研機構 中央農業研究センター  
黒川 俊二

侵入外来雑草のセッションでは、口頭発表が6題、ポスター発表が15題の合計21題あった。研究対象地域はアジア全域、ハワイ、カリフォルニア、オーストラリアに至るまでアジア太平洋地域全域にわたっていた。生育地についても、国立公園 (O-010) やヒマラヤ植生 (O-015) など自然生態系だけでなくトウモロコシなど作物畑についても発表 (P-061) があった。種については、各地で大きな問題となっている *Parthenium* が特に目立っており、侵略性に関する生育特性や気候変動に対する反応性にいたるまで幅広い研究が展開されていた (O-012, P-060, P-061, P-064, P-065)。

*Parthenium hysterophorus* はキク科の種子繁殖植物で、風や水、自動車などによって散布される拡散性の高い種子を多量に生産するため非常に侵略性が高い。さらに、接触によるひどい皮膚炎や喘息などを引き起こすため、人の健康に対する被害も大きい。日本にも入ってきていることが確認されているが、これまでのところ、大きな問題として取り上げられていないようである。今後、温暖化が進むと日本においても深刻な問題を引き起こすかもしれない。すでに各国で先進的に取り組まれている研究や対策について、今のうちにしっかりとレビューしておく必要があるかもしれない。P-066 の発表では *Solidago canadensis* の倍数性の違いと競合能力について比較実験されており、倍数化が侵略性を増大させる可能性が示された。こうした種の進化と侵略性との関係性についても非常に興味深いテーマである。また、*Acacia* 属の侵入植物がもたらす植物リターによる土壌環境に対するインパクトを評価している発表もあった (O-013, P-067)。しかしながら、葉のリターが増えているにもかかわらず、窒素の有意な増加は認められず、窒素固定の影響は確認できなかった。これは時間スケールが短い (25

年以下) ことによるかもしれないため、長期間のモニタリングが必要であるとされた。

外来雑草の侵入による Flora の変化についての発表は、ヒマラヤ (O-015)、ティモール (P-059)、韓国 (P-063)、トルコ (O-014, P-070)、中国 (P-071) などの国と地域であり、各地域で Flora 調査に基づく対策立案の重要性が認識されていることが確認できた。特に韓国における実態調査に関する研究では発表者と直接議論することができ、ワルナスビなどの外来雑草の分布地域が北部に集中していることについて、その要因として米軍基地の存在との関連性を指摘していたのが印象的であった。日本においては継続的に全国調査が行われている例がほとんどないため、他国に見習って侵入外来雑草の被害実態の変化に対応できる取り組みが必要であると考えられる。

侵入防止対策に関わる研究では、法規制の科学的根拠とするため、混入種子の DNA バーコーディングによる種の同定技術を開発している研究 (O-011) や、愛知目標の9番目の個別目標 (2020年までに、侵略的外来種及びその定着経路が特定され、優先順位が付けられ、優先度の高い種が制御又は根絶される。また、侵略的外来種の導入又は定着を防止するために、定着経路を管理するための対策が講じられる。) を達成するための科学的知見を蓄積する重要性を指摘する発表 (O-014) があった。愛知目標達成に関しては世界各国で対応が進んでおり、雑草分野でも論文や国際会議での発表が目立ってきている。残念ながら、日本での対応に関しては、APWSS を含め雑草関連の国際会議の場で発表されているのを目にすることがない。環境省関連の研究者を雑草分野として取り込んでいく必要性を感じる。日本への侵入実態に関しては、Nishi ら (P-069) によって輸入穀物中の混入雑草種子の種組成と輸入港周辺の植生とを比較している興味深い研究が発表されていた。結果として、輸入穀物に高頻度で見つかる種については、輸入港でない港周辺よりも輸入港周辺でより高い頻度で見つかる傾向があることを示した。このような知見の蓄積は、侵入外来雑草の高リスク地域の推定に貢献できると考えられ、日本全体での侵入外来雑草問題の対策に非常に重要であると考えられた。